

## 現代ガラス 素材との対話

ガラスはおよそ4500年の歴史をもつといわれています。実用的な食器や花瓶などを通して長く親しまれ、また、装飾的な役割もしばしば担ってきました。



高橋禎彦《花のような》より 2002(平成14)年

こうしたガラスの中に造形

芸術の素材としての性格を強く意識したのが現代の作家たちです。

ボヘミアン・ガラスの伝統が名高いチェコスロヴァキア(当時)では戦後、ガラス造形教育が盛んになりました。作家たちは、伝統的な技法や装飾表現に縛られない、ガラスによる立体造形芸術を目指し、それを「ガラス彫刻」と呼びました。1960年代、アメリカでは「スタジオ・ガラス運動」が起こりました。多くの作家がスタジオに専用の小型溶解炉を設置し、職人や工場には必ずしも頼らずに、デザインから仕上げまで手がけるようになったのです。ガラスをめぐる世界的な動向は日本の作家にも大きな影響を与えました。

作家が素材との新たな関係を模索し続ける中で生まれた作品は、私たちにガラスの可能性と面白さを伝えてくれます。今回の展示にはチェコのS.リベンスキー、スタジオ・ガラス運動の提唱者H.リトルトンをはじめ国内外の現代ガラス作家が登場します。彼らがガラスという素材とどのように向き合ってきたのかを、個性豊かな作品を通してご覧ください。